

ヤルカンド= オアシスに残る清朝支配期の史跡

小 沼 孝 博

現在筆者は、北京の中国第一歴史檔案館に所蔵されている清朝の行政文書を主に利用し、カシュガリア（東トルキスタン、中国領トルキスタン）における清朝支配のあり方、及び支配下にあったテュルク系ムスリム有力者（王公・ベク）の政治動向について研究を進めている。満洲Manju人政権の清朝は、1759年にカシュガリアを軍事征服し、その支配は、19世紀後半のムスリム反乱とそれに続くヤークーブ=ベク政権樹立によって一時中断するが、清朝が滅亡する1912年まで続いた。清朝による当該地域の征服と支配は、現代中国における「新疆ウイグル自治区」の成立を考える上でも、極めて重要な意味を持っている。

筆者は2002年8月（堀直氏らと同行）と2004年8月（単独）に現地を訪れ、現存している清朝支配期の史跡を調査する機会を得た。以下本稿では、筆者が実見したヤルカンド=オアシス（現在の莎車 Yakan 県）に残る史跡について、文献中の記述と照らし合わせながら、その現状を述べたい。なお、提示する写真はすべて筆者が撮影したものである。

満城の城壁

カシュガリアを征服した清朝は、各主要都市に清朝当局の所在地（衙門）となる城塞を建造した。この城塞は、「満城」（時代が下ると「漢城」と呼ばれ、城内には、北京から派遣された大臣 Amban・官員、及び天山北路（イリ・ウルムチ）や甘肅から派遣された兵丁が駐留しており、兵丁の数はカシュガルやヤルカンドで1,000名程度であった。これに対し、ムスリム住民が居住する従来から存在した城塞は「回城」と呼ばれた。満城と回城を双方の住民が自由に往来することは禁じられていた[羽田1982: 106-108]。

『回疆通志』巻八の記述によると、ヤルカンドの満城は、征服直後の1759年（乾隆24）に回城内の西南一隅に建てられたという。この一帯は、ヤルカンド=ハン国時代の王宮跡地であり、現在では人民公園の敷地となっている。18世紀後半にヤルカンドを訪れた満洲人旅行者の椿園七十一は、当時の様子を「(清朝の) 官員・兵士が守る城以外は、すべて回（ムスリム）であり、櫛のように集居し、ほとんど空き地はない。[この地にいる] 中

国商民とは、山西・陝西・江蘇・浙江の人で、險路をいとわず、この地で商売をしている」（『西域聞見録』卷二）と記している。満城と回城の間には、バザールが成立し、内地商人（漢人・回民）も進出して活況を呈したと思われる。しかし、1828年（道光8）のジャハンギールの反乱後、清朝は回城外の西南約2kmの地に新たに城塞を建設し、衙門の人員・機能をすべてそちらに移し、旧満城跡地をハーキム＝



写真1

ベクの居所とした。以後、現地のムスリム住民は、新たな満城を「新城yengi shahr」と呼び、それと区別して回城を「旧城kohna shahr」と呼ぶようになったのである〔堀1987: 42〕。この「新城」と「旧城」の区画名称は、現在でも一般的に通用している。

さて、莎車県の中心市街に現存する満城の城壁は、この「新城」の北壁と西壁の一部である（写真1）。人民解放軍の公署の敷地内にあるため、全体としてどれほど残されているのかは分からないが、防御壁としての機能は現在でも有用であるため、破壊を免れているのであろう。公署の正門から眺めたところ、貫道の穿たれている箇所があることを確認できた。

城壁以外に、満城に関連する史跡は存在していないようだが、ヤークーブ＝ベクの統治期（1865-1877）にヤルカンドを訪れたイギリスのフォーサイス一行の報告から、当時の様子を窺うことができる。それによれば、城壁の周囲には深い壕が掘られ、門は東側に一つだけであった。城内には、清朝の大臣が起居した頑丈な内城と官僚や外国の来訪者が利用するいくつかの建物があった。その建物の一つは、外国の大使をもてなすレセプションルームとして使われ、満城の中央に位置していた。そして、コーカンドから到来したヤークーブ＝ベク勢力の武将や兵士も、満城内に駐留し、上記の施設を利用していたという。現在においても、県政府・莎車賓館などの施設が満城跡地に位置していることは興味深い。また、清朝支配期には、満城の東門と回城の西門（アルトゥン門）とを結ぶ路上には多くの店舗が建ち並び、活発な商業活動が展開されていた。しかし、ヤークーブ＝ベクの統治下においては、この通りでの商業活動は衰退し、四分之三の店舗が倒産していたという〔Forty1875: 35〕。なお、現在この通りはウイグル族の職人街となっている。

マンジュ＝キョル

清朝進出以前の1732年にイリを訪れたロシアのウグリモフ少佐は、ヤルカンド回城について、「ヤルカンドの町についていえば、（もし本当ならば）それは一万人も及ぶ住民を

持ち、ホタン地方で最も美しい」[Веселовский1887: 235]と述べている。また清朝征服直後（1763-64頃）の記録には、回城内の住民総数は11,730人（2,843戸）であり、所属の29荘を合わせたヤルカンド=オアシス全体では60,400余人（15,000余戸）であると記されている（『西域地理図説』巻一）。年間降雨量が100mmに満たないヤルカンドでは、この人口を支えるため、ヤルカンド河から引水する水路網が発達した[堀2005]。一般的にカシュガリアでは、河川 darya, su の水は、灌漑水路（幹渠 östäng・枝渠 ariq）によって都市・農村に引き込まれ、末端の生活空間においてキョル köl と呼ばれる溜池に蓄えられていた[堀2003: 80-81]。清代のヤルカンド回城における水利用に関しても、「町中に水坑がある。城の南にあるカラ=ウス Qara Usu（ヤルカンド河）から引いた水は、城の北側へと達する。これを飲料水として利用している」（『欽定皇輿西域図志』巻十八）と伝えられている。

一万人を越える人口を有したヤルカンド回城には、多くのキョルが点在していた。フォーサイスの報告によれば、城内のキョルの数は120だったという[Fortyth1875: 36]。また、『西疆雜述詩』巻二の記載に基づけば、76の「潦渠」（キョル）が存在し、その中で最大ものが「満洲潦渠」、すなわちマンジュ=キョル Manju köl であった[堀1987: 48]。



写真2

このマンジュ=キョルの位置を、2002年8月の調査で特定し、現状を確認することができた。マンジュ=キョルには、人民公園の前門から東へ20m程の距離にある、小さな街路を北に約100m進み、左折して西に約50m行くと到達できる。その大きさは、他のキョルとは比べものにならない、まさに圧巻であった（写真2）。ただ残念なことに、現在では水は完全に干上がった状態となっている。これはマンジュ=キョルに限ったことではなく、他のキョルにも共通した現象であり、近年の水道設備の普及により、キョルでの貯

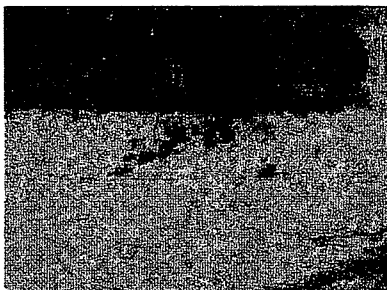


写真3

水自体が不要になったことに起因している。筆者がその場にいた住民に尋ねたところ、マンジュ=キョルの水は10年前には存在していたと答えてくれた。また、マンジュ=キョルの西側には、かつての取水口が残されているが（写真3）、数年前に南側の人民公園内に大きな人口池の造成を開始して以来、水の供給は止んでしまったという。

このマンジュ=キョルは、その名称・位置から推

測して、1759年から1828年まで現在の人民公園の敷地に衙門を構えていた清朝当局が掘削し、利用していたものだと考えられる。かくも巨大なキョルの掘削には、それ相応の政治力が必要だったはずであり、ヤルカンド=オアシスにおける清朝当局の政治力の大きさを相対的に把握する上で貴重な史跡であるといえよう。なお、マンジュ=キョルは、莎車県の「県級重点文物保護単位」に指定されているようで、キョルの一角にそれを示す立て札があった。ただし、掘削時期を「秦 (qin) 代」と表示しているのは、明らかに「清 (qing) 代」の誤りである。

ヤカ=エリク郷コルル村の卡倫

卡倫 (満洲語では karun) とは、清代に辺疆地帯に設置された警備処のことであり、カシュガリアでは各オアシスと清朝の勢力圏外を結ぶ路線上の要衝に設置され、現地の東トルコ語では qaravul と呼ばれていた [堀 1978: 102]。清朝史料によれば、各卡倫には侍衛1名、兵丁5~20名、一般ムスリム2~19名、通訳1名が駐留していた。侍衛は3年1換で北京から派遣され、任務の遂行に怠りがなければ、任期満了時の昇級が定められていた (『清漢奏稿』巻六、11a-b、嘉慶12年7月24日、カシュガル参贊大臣晋昌 Jincang の上奏)。兵丁の種類は、カシュガル所属の卡倫には八旗兵のみ、ヤルカンド所属の卡倫には八旗兵と緑營 (漢人) 兵、ホタン所属の卡倫には緑營兵のみが駐留しており、オアシスごとに相違があった (『回疆通志』巻七・巻八)。また、卡倫に所属していた一般ムスリムは、併設された耕地で農作物・馬草を栽培していた (『清漢奏稿』巻二、2a-5b、嘉慶11年9月21日、晋昌の上奏)。卡倫における主要な任務は、対外交渉路の監視、外部勢力の動向調査、外国商人の出入国検査と登記、税関事務などであった [堀 1978: 102-103; 澤田 1993: 223]。

筆者が目にした卡倫は、莎車県の中心市街から西南に34km、車で一時間程の場所にあるヤカ=エリク Yaqa eriq 郷コルル Qorul 村に存在するものである。ヤカ=エリクの yaqa とは元々「周縁」を、eriq は「水路」を意味する語だが、その名が示す通り、ヤルカンド=

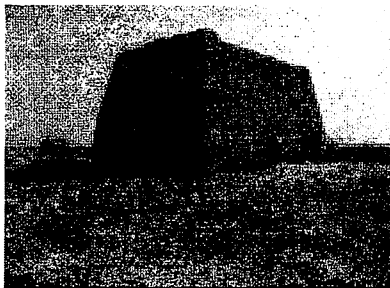


写真4

オアシスの西辺に位置しており、ヤルカンド河から水を引くコルワト Korwat 渠が南北に貫流している。また、村名である qorul とは、おそらく qaravul の転訛であろう。

さて、コルル村の卡倫は、コルワト渠のすぐ西側にある高台の上に、南北に並ぶ形で2つ存在 (以下、南卡倫・北卡倫と記す) している (写真4)。両卡倫とも、かつては東壁に階段が附設されていたようで、

上まで上ることができた。卡倫の上から周囲を一望すると、東に耕地、西に沙漠が広がっており、卡倫がその境界上に設置されていることがわかる(写真5)。また、両卡倫の間には、舗装されていない一本の道が西へと延びている。この道は現在ではほとんど使われていないようだが、スタインの地図[Stein1921: sheet, no. 11]にはヤルカンドとタシクルガンを結ぶ幹線として描かれている。かつてコルル村の卡倫は、ヤルカンド=オアシスへの西の玄関口の一つであり、パミール方面からの来訪者を監視するため、道を挟んだ高台の上に設けられたのであろう。

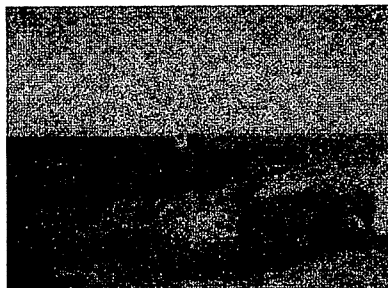


写真5

卡倫の現状については、ウイグル族の郷土史家であるアディル=ムハメト=トゥラン Adil Muhamät Turan 氏の著作に詳しいので、その説明に基づいて述べたい。コルル村の卡倫は、北緯 76°58'17"、東経 38°13'50"、海拔 1,365m に位置している(筆者が携帯した GPS も、これとほぼ同じ数値を示した)。オタン=コルワト Ötäng Korwat 渠の西側、タシクルガン県とアクト県に通じる小路上にある。南卡倫と北卡倫の間隔は 260m であり、形状はどちらもピラミッド型で、内部は空洞となっている。北卡倫の大きさは、東西 16.9m、南北 17.8m、高さ約 10m であり、東側の尖塔 päshtağ (物見・烽火台か?) は崩壊している。一方の南卡倫は、東西 17.8m、南北 16.1m、高さ約 9.6m であり、北側の尖塔は現存している。どちらも粗い土レンガ (46×23×7cm) を積み重ねて作られており、外壁には漆喰が塗られている。また、現在までのところ遺物が発見されたことはないという [Adil 2001: 137]。上記の卡倫の形状は、19世紀末にワリハーノフが通過したカシュガル所属の「伊苏里克(イヌリク)卡倫」とも共通しており [Валиханов1985: 39]、清代の卡倫の基本形態と見なされる。

このコルル村の卡倫に関する記事が『新疆図志』の中に残されている。ヤルカンド城の西 40 里にあった「牙合咬勒克 (= Yaqa eriq) 駅 有卡倫」(卷八十二) が、コルル村の卡倫に相当するものである。卡倫を持つ「駅」と記されているが、これは光緒 29 年 (1903) に駅舎として新設されたため、それまでは「綺蓋子牙(チガイズヤ)卡倫」と呼ばれていた(卷八十四)。そして、この卡倫と駅舎の複合施設には、駅書 1 名、馬夫 2 名が常駐し、馬三頭と年間経費 266 両 7 錢 7 分 5 厘が割り当てられていたという(卷八十五)。

以上、ヤルカンド=オアシスに現存する清朝支配期の三つの史跡を紹介した。無論、同様の史跡は他のオアシスにも存在している。それらの史跡を丹念に調査することは、文献

史料からだけでは把握が難しい、清朝のオアシス社会に対する関わり方を知る上で大きな助けとなるであろう。それ故に、史跡の大半が保護の対象とはなっておらず、放置されたままであることが残念に思われた。

《史料・文献》

- Adil Muhamät Turan. 2001 *Qäshqärdiki qädimiy izlar*, Ürümchi: Shinjang khälq näshiriyati.
- Валиханов, Ч. Ч. 1985 *Собрание сочинений в пяти томах*, том 3, Алма-Ата.
- Веселовский, Н. И. 1887 “Посльство к зюнгарскому Хун-тайджи Цеван Рабтану капитана от артиллерии Ивана Унковского и путевой журнал его за 1722-1724 гоьы,” *Записки Императорского Руского географического общества по отделению этнографии*, том X, выпуск 2, Санкт Петербург.
- Fortyth, Sir T. D. 1875 *Report of a Mission to Yarkund in 1873*, Calcutta: Foreign Dept Press.
- 羽田明 1982 『中央アジア史研究』京都：臨川書店。
- 堀直 1978 「清代回疆の交通事情—軍台と卡倫を中心として—」『大手前女子論集』12.
- 1987 「回疆都市ヤールカンド—景観復元の試み—」『甲南大学紀要』文学編63.
- 2003 「ヤールカンド=オアシスの水利用—歴史学の立場から—」『オアシス地域研究会報』1-2.
- 2005 「清代ヤールカンドの農村と水路」『甲南大学紀要』文学編138.
- 『回疆通志』12巻，和寧，嘉慶9年。
- 『欽定皇輿西域図志』48巻，傅恒修，乾隆47年。
- 真田安 1986 「都市・農村・遊牧」佐藤次高編『講座イスラム3 イスラム社会のシステム』筑摩書房。
- 澤田稔 1993 「セミレチエからカシュガルへ—ワリハーノフの調査紀行—」『帝塚山短期大学研究年報』41.
- Stein, A. 1921 *Serindia: detailed report of explorations in Central Asia and Westernmost China*, Vol. V, Maps, Oxford: Clarendon.
- 「清漢奏稿」=「嘉慶十一年七月起至十二年清漢奏稿」佐口透氏所蔵
- 『西域地理図説』8巻，佚名，乾隆28-29年頃→『西域地理図説註』阮明道主編，延吉：延边大学出版社，1992.
- 『西域聞見録』4巻，椿園七十一，乾隆42年。
- 『西疆雜述詩』4巻，蕭雄，光緒18年。
- 『新疆図志』116巻，袁大化修，宣統3年。

【付記】本稿は、第7回日本沙漠学会沙漠誌分科会「中国の沙漠：乾燥地帯と人文環境」(中央大学後楽園キャンパス、2005/7/23)における口頭報告「満洲 (Manju) 人支配期の新疆——タクラマカン砂漠周辺オアシスに残る清朝の痕跡——」の一部を基に執筆した。なお、本稿は平成15～17年度文部科学省科学研究費(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

(日本学術振興会特別研究員, 筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程)